

「言語連想検査法WAT-IIの患者117名の刺激語の分析」

小林 俊雄

The analysis of the stimulus words from the 117 patient's responses by the Word Association Test WAT-II

Toshio Kobayashi

Abstract

The Word Association Test WAT-II contains forty two stimulus words. The author elicits 117 patients of WAT-II psychological data from the author's text (1989) "The Word Association Test method : Inner world from the view of WAT-II". The man group of patients n=58 shows the popular response of 「woman」 to stimulus word of <man> ($\chi^2=3.76$ df=1 p<0.10), the popular response of 「music」 to stimulus word of <record> ($\chi^2=3.34$ df=1 p<0.10) more than the woman group of patients n=59 by the significant level at 10%. The woman group of patients n=59 shows the popular response of 「past」 to stimulus word of <present> ($\chi^2=3.41$ df=1 p<0.10), the popular response of 「ease」 to stimulus word of <anxiety> ($\chi^2=3.00$ df=1 p<0.10), and the popular response of 「past」 to stimulus word of <future> ($\chi^2=3.76$ df=1 p<0.10), more than the man group of patients n=58 by the significant level at 10% ($\chi^2=2.93$ df=1 p<0.10).

Key words : Word Association Test, WAT-II, popular response

キーワード : 連想テスト、WAT-II、ポピュラー反応

I 研究の目的

言語連想検査法WAT-IIは、刺激語42個について、患者にひとつずつ刺激語を聞いてもらって、連想したことを一つだけ単語で答えてもらう個人法の心理検査

である¹⁾。1975年から小林俊雄は、精神科病院の患者に言語連想検査法WAT-IIを実施してきた。1980年に小林俊雄は、言語連想検査法WAT-IIの検査用紙、教示、記録法、解釈法、言語連想検査法WAT-IIの患者データ173例などを報告¹⁾した。本研究の「言語連

想検査法の患者 117 名」というのは、マニュアル本『言語連想検査法—WAT-II から見た心の世界』²⁾に掲載されている患者 117 名のことである。言語連想検査法 WAT-II のマニュアル本は、『言語連想検査法—WAT-II から見た心の世界』²⁾、『子供の心が分かる—心理カウンセラーのノートから』³⁾、『臨床心理アセスメントの実際—カウンセリングと連想テスト』⁴⁾などが出版されている。『よくわかる心理学講義』⁵⁾では、言語連想検査法 WAT-II を用いて、正常人の心理も解説されている。

小林俊雄は、『言語連想検査法—WAT-II から見た心の世界』²⁾に掲載されている患者 n=117 の遅延反応と反応不能について、診断群、男女差などの視点から分析した⁶⁾。患者が刺激語を聞いて連想反応を出すまでの時間が 10 秒以上の連想反応を「遅延反応」delayed response²⁾という (p39)。「遅延反応」は、遅延反応を示した刺激語に関係していることについて、患者が心の問題 (コンプレックスという) を持っているらしいことを暗示している。遅延反応が続出する場合には、うつ気分のサイン⁷⁾、知能低下のサイン⁸⁾、思考渋滞のサイン、思考崩壊のサインなどとして解釈²⁾できると解説されている。患者全体 n=117 で「遅延反応」の出現率が高い刺激語 (出現率 10.0%以上) は、<愛情>・<けんか>・<現在>・<子供>・<自分>・<新聞>・<セックス>・<尊敬>・<電波>・<電気>・<友達>・<母親>・<不安>・<勉強>などの刺激語⁶⁾である。「遅延反応」の出現数の平均は、患者全体 n=117 で 3.51 個 (SD 5.17)、男性患者群 n=56 で 3.69 個 (SD5.94)、女性患者群 n=61 で 3.31 個 (SD4.34)⁶⁾である。<学校>・<父親>・<注射>・<ピストル>などの刺激語の「遅延反応」⁶⁾は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。

「反応不能」²⁾は、患者が「わかりません」と答えたり、患者が沈黙してしまう反応(「…」と表示)のことで、病的反応と分類される (p32)。患者が自我防衛のために、刺激語との関わりを避けるので反応不能が

出現する。「反応不能」²⁾は、コンプレックスのサイン、極度のうつ状態のサイン⁷⁾、極度の知能障害のサイン⁸⁾、反応拒否のサインなどとして解釈されることが多い。

「反応不能」は男性患者群 n=57 のほうが多い⁶⁾。「反応不能」の出現数の平均⁶⁾は、患者全体群 n=117 で 1.50 個 (SD3.20)、男性患者群 n=57 で 1.67 個 (SD3.94)、女性患者群 n=60 で 1.34 個 (SD2.37) である。<自分>・<セックス>・<不安>などの刺激語では、患者全体 n=117 で反応不能が多い。精神科患者群 n=67 だけに「反応不能」が出現している刺激語が 24 個もある。「反応不能」の出現数の平均は、精神科患者群 n=67 で 2.11 個 (SD 4.06)、心身医学患者群 n=16 で 0.81 個 (SD 1.73)、脳外科患者群 n=21 で 0.80 個 (SD1.24)、整形外科患者群 n=13 で 0.38 個 (SD0.86) である。精神科患者群 n=67 の「反応不能」は、出現数が突出して高い。精神科患者群 n=67 の患者の心は関わりを持ってないことが多くて、他の疾患群の患者にくらべると生きて行きにくいことが考察される。

『言語連想検査法—WAT-II から見た心の世界』²⁾に掲載されている患者 n=117 のポピュラー反応について、小林俊雄は、診断群、男女差などの視点から分析した⁹⁾。ポピュラー反応は、出現率の高い連想反応 (出現率 10%以上) のことである。ポピュラー反応は、出現数の平均⁹⁾が、患者全体 n=117 で 7.67 個 (SD 6.36)、男性患者群 n=58 で 7.67 個 (SD6.36)、女性患者群 n=59 で 7.67 個 (SD5.65) である。

本研究の目的は、上記の言語連想検査法 WAT-II の二つの論文^{6) 9)}の分析結果を再検討して、解釈の客観性を向上させるために、言語連想検査法 WAT-II の刺激語別に「ポピュラー反応」「遅延反応」「反応不能」などの客観的な数値データを提示することである。

II 研究の方法

1. 調査対象

病院で小林俊雄が心理業務として心理面接を実施し

たすべての患者のなかで、言語連想検査法WAT-IIを実施している患者が調査対象である。

2. 調査期間

調査期間は、1975年4月1日から1989年8月31日までである。言語連想検査法WAT-IIはすべての患者について個別法で小林俊雄が実施する。

III 研究調査の結果と考察

1. 患者についての研究結果

1) 患者の人数の調査結果

6つの病院で小林俊雄が心理面接を実施したすべての患者のなかで、言語連想検査法WAT-IIを実施した患者は468名である。この468名を年齢順に配列して、4ケース毎に選抜して患者117名の言語連想検査法WAT-IIの臨床心理記録を得た。本研究の言語連想検査法WAT-IIの臨床心理記録は、著書『言語連想検査法—WAT-IIから見た心の世界』(小林1989)の言語連想検査法WAT-IIの臨床心理記録と全く同じ資料である。言語連想検査法WAT-IIは、すべての患者について小林俊雄が1975年4月1日から1989年8月31日までに個別法で実施した。

2) 患者の診断の調査結果

患者117名の診断名は、著書『言語連想検査法—WAT-IIから見た心の世界』²⁾で39種類が掲載されている(p41)。本研究では、患者117名の39種類の診断名を、4群に分けて整理した。具体的には精神科患者群・心身医学患者群・脳外科患者群・整形外科患者群である(表1)。年齢平均の調査をした。患者全体n=117は年齢平均37.67歳(SD30.40)(SD53.03)、精神科患者群n=67は年齢平均34.41歳(SD53.03)、心身医学患者群n=16は年齢平均34.87歳(SD38.18)、脳外科患者群n=21は年齢平均45.95歳(SD26.87)、整形外科患者群n=13は年齢平均44.53歳(SD26.87)

である。男性患者群n=58の年齢平均は39.82歳(SD50.91)である。女性患者群n=59の年齢平均は35.55歳(SD48.08)である。患者の年齢平均の男女差は10%水準¹⁰⁾で有意である($\chi^2=2.80$ df=1, $p<0.10$)。

3) 患者117名の男女差

患者の出現率は、患者全体n=117で出現率100.00%、男性患者群n=58で出現率48.71%、女性患者群n=59で出現率51.28%である。患者の出現率に有意な男女差はない(CR=0.09 $p>0.05$)。患者の男女比を調査した。患者群全体n=117の男女比は1:1.01(男n=58、女n=59)、精神科患者群n=67の男女比は1:1.68(男n=25、女n=42)、心身医学患者群n=16の男女比は1:1(男n=8、女n=8)、脳外科患者群n=21の男女比は1:0.5(男n=14、女n=7)、整形外科患者群n=13の男女比は1:0.18(男n=11、女n=2)である。

4) 患者117名の刺激語別の「ポピュラー反応」「遅延反応」「反応不能」の分析調査の結果

刺激語は、アイウエオ順で掲載する。言語連想検査法WAT-IIの刺激語は<>印で記載する。患者の連想反応は「」印で記載する。

<愛情>という刺激語の分析の結果

<愛情>という刺激語の連想反応は、多種多様に出現する。<愛情>という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。<愛情>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率10.0%以上)。<愛情>という刺激語は、連想をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。<愛情>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が、男性患者群n=58の20.68%、女性患者群n=59の8.47%、患者全体n=117の14.5%である。<愛情>という刺激語は、「遅延反応」の出現数の男女差が20%水準で有意である($\chi^2=2.67$ df=1 $p<0.20$)。男性患者群n=59は、<愛情>という刺激語に連想反応をすぐに答えることが難しい。<愛情>という刺激語は、

「反応不能」の出現数が中位である。＜愛情＞という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人がいる。＜愛情＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体 n=117 の 4.27% である。＜愛情＞という刺激語は、「反応不能」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、＜愛情＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 は 7.69% である。

＜うち＞という刺激語の分析の結果

＜うち＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜うち＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜うち＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。＜うち＞という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。＜うち＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117 の 6.8% である。＜うち＞という刺激語は、「遅延反応」

の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.11$ df=1 p<0.80)。＜うち＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が中位である。＜うち＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が患者全体 n=117 の 2.56% である。＜うち＞という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。＜うち＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体 n=117 の 2.56% である。＜うち＞という刺激語は、「反応不能」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、＜うち＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。＜うち＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00% である。

＜お酒＞という刺激語の分析の結果

＜お酒＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜お酒＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜お酒＞という刺激語は、「遅延反応」の出現

表 1 患者の診断の調査結果 n=117

患者群	出現率%	患者群の詳細な病名と患者数
精神科患者群 n=67	57.26%	統合失調症 28。うつ病 8。てんかん 7。躁うつ病 5。アルコール中毒 5。有機溶剤乱用 3。精神鑑定 2。反応性精神病 1。非定型精神病 1。急性精神病 1。脳動脈硬症 1。知的障害 1。診断保留 2。退行期精病 1。認知症 1。
心身医学患者群 n=16	13.67%	自律神経失調症 4。ヒステリー 1。過換気症候群 1。神経性胃炎 1。過敏性大腸炎 1。頭痛 1。神経症 3。不眠症 1。離人症 1。性格変化 1。診断保留 1 (心因性うつ病)。
脳外科患者群 n=21	17.94%	脳卒中 14。CO中毒 2。脳挫傷 2。くも膜下出血 1。脳炎後遺症 1。頭部外傷 1。
整形外科患者群 n=13	11.11%	骨折 3。椎間板ヘルニア 2。脊髄損傷 2。脊椎炎疑い 2。頸椎捻挫 1。頸椎損傷 1。骨化症 1。切断 1。
117名	100.00%	

(出典：小林俊雄 (2014) 言語連想検査法の患者 117 名の診断の調査結果、「言語連想検査法 WAT-II の患者 117 名のポピュラー反応の分析」、吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要、第 11 号、1 頁-14 頁より修正)

数が少ない。〈お酒〉という刺激語は、連想反応をすぐに答えられる言葉であると考察される。〈お酒〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が、男性患者群 $n=58$ の 6.89%、女性患者群 $n=59$ の 5.08 %、患者全体 $n=117$ の 5.9%である。〈お酒〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。〈お酒〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。〈お酒〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈お酒〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、男性患者群 $n=58$ の 1.72%、女性患者群 $n=59$ の 1.69%、患者全体 $n=117$ の 1.70%である。〈お酒〉という刺激語は、「反応不能」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.52$ $df=1$ $p<0.50$)。病気別に調査すると、〈お酒〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。〈お酒〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 $n=67$ の 2.98%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%である。

〈夫〉という刺激語の分析の結果

〈夫〉という刺激語は、「妻」という連想反応が多い。〈夫〉という刺激語は、「妻」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈夫〉という刺激語は、「妻」という連想反応の出現率が、男性患者群 $n=58$ の 53.44%、女性患者群 $n=59$ の 47.45%、患者全体 $n=117$ で 50.42%である。〈夫〉という刺激語は、「妻」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.41$ $df=1$ $p<0.50$)。〈夫〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈夫〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈夫〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 6.89%、女性患者群 $n=59$ の 6.77%、患者全体 $n=117$ の 6.8%である。〈夫〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.03$ $df=1$

$p<0.90$)。〈夫〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が中位である。〈夫〉という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人の出現数は中位である。〈夫〉という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。〈夫〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 5.17%、女性患者群 $n=59$ の 1.69%、患者全体 $n=117$ の 3.41%である。〈夫〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.27$ $df=1$ $p<0.70$)。病気別に調査すると、〈夫〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 4.47%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 4.76%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%である。

〈男〉という刺激語の分析の結果

〈男〉という刺激語は、「女」という連想反応の出現率が高い。〈男〉という刺激語は、「女」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈男〉という刺激語は、「女」という連想反応の出現率が、男性患者群 $n=58$ の 77.58%、女性患者群 $n=59$ の 61.01%、患者全体 $n=117$ の 69.23%である。〈男〉という刺激語は、「女」という連想反応の出現数の男女差が 10%水準で有意である ($\chi^2=3.76$ $df=1$ $p<0.10$)。男性患者群 $n=58$ は、〈男〉という刺激語で「女」という連想反応を出す人が多い。〈男〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が中位である。〈男〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が、男性患者群 $n=58$ の 12.06%、女性患者群 $n=59$ の 3.38%、患者全体 $n=117$ の 7.6%である。〈男〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、20%水準で有意である ($\chi^2=1.77$ $df=1$ $p<0.20$)。男性患者群 $n=58$ は、〈男〉という刺激語で、連想反応をすぐに答えることが難しい人が多い。〈男〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。〈男〉という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人が少ない。〈男〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈男〉という刺激語の「反応不能」

の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 0.00%、患者全体 n=117 の 0.85%である。〈男〉という刺激語は、「反応不能」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、〈男〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。〈男〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 は 1.49%、心身医学患者群 n=16 は 0.00%、脳外科患者群 n=21 は 0.00%、整形外科患者群 n=13 は 0.00%である。

〈女〉という刺激語の分析の結果

〈女〉という刺激語は、「男」という連想反応が多い。〈女〉という刺激語は、「男」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈女〉という刺激語の「男」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 56.89%、女性患者群 n=59 の 50.84%、患者全体 n=117 の 53.84%である。〈女〉という刺激語は、「男」という連想反応の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.43$ df=1 p<0.70)。

〈女〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈女〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈女〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 0.00%、患者全体 n=117 の 4.2%である。〈女〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=3.41$ df=1 p<0.10)。男性患者群 n=58 は、〈女〉という刺激語で連想反応をすぐに答えられない人が多い。

〈女〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。〈女〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈女〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体の 1.70%である。〈女〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.52$ df=1 p<0.50)。病気別

に調査すると、〈女〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。〈女〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 2.98%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

〈過去〉という刺激語の分析の結果

〈過去〉という刺激語は、「未来」という連想反応と「現在」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈過去〉という刺激語は、「未来」という連想反応の出現率が、男性患者群 n=58 の 20.68%、女性患者群 n=59 の 27.11%、患者全体 n=117 で 23.93%である。〈過去〉という刺激語の「未来」という連想反応の出現数の男女差は、30%水準で有意である ($\chi^2=0.66$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、〈過去〉という刺激語に「未来」という連想反応を出す人が多い。〈過去〉という刺激語は、「現在」という連想反応も多い。〈過去〉という刺激語の「現在」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 11.86%、患者全体 n=117 の 11.11%である。〈過去〉という刺激語の「現在」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.06$ df=1 p<0.80)。

〈過去〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。〈過去〉という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。〈過去〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.48%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 7.6%である。〈過去〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.15$ df=1 p<0.70)。

〈過去〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。〈過去〉という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人が多い。〈過去〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。〈過去〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、男性患者群 n=58 の

5.17%、女性患者群 n=59 の 5.08%、患者全体 n=117 の 5.98%である。〈過去〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.15$ df=1 p<0.70)。病気別に調査すると、〈過去〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 7.46%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

〈学校〉という刺激語の分析の結果

〈学校〉という刺激語は、「先生」、「生徒」、「勉強」などの3つの連想反応が「ポピュラー反応」である。〈学校〉という刺激語は、「先生」という連想反応が多い。〈学校〉という刺激語は、「先生」という連想反応の出現率が、男性患者群 n=58 の 18.96%、女性患者群 n=59 の 18.60%、患者全体 n=117 の 18.80%である。〈学校〉という刺激語の「先生」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。〈学校〉という刺激語は、「生徒」という連想反応も多い。〈学校〉という刺激語は、「生徒」という連想反応の出現率が、男性患者群 n=58 の 15.51%、女性患者群 n=59 の 22.03%、患者全体 n=117 の 18.80%である。〈学校〉という刺激語の「生徒」という連想反応の出現数の男女差は、30%水準で有意である ($\chi^2=0.81$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、〈学校〉という刺激語に「生徒」という連想反応を出す人が多い。〈学校〉という刺激語は、「勉強」という連想反応の出現率が、男性患者群 n=58 の 18.96%、女性患者群 n=59 の 11.86%、患者全体 n=117 の 15.38%である。〈学校〉という刺激語は、「勉強」という連想反応の出現数の男女差が 20%水準で有意である ($\chi^2=1.13$ df=1 p<0.20)。男性患者群 n=58 は、〈学校〉という刺激語に「勉強」という連想反応を出す人が多い。

〈学校〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈学校〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈学校〉という刺激語の

「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.48%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 2.5%である。〈学校〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。〈学校〉という刺激語の「遅延反応」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。

〈学校〉という刺激語の「反応不能」の出現数は少ない。〈学校〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈学校〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 1.70%である。〈学校〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.52$ df=1 p<0.50)。病気別に調査すると、〈学校〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。〈学校〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 2.98%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

〈神さま〉という刺激語の分析の結果

〈神さま〉という刺激語は、「仏様」という連想反応の出現率が高い。〈神さま〉という刺激語は、「仏様」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈神さま〉という刺激語の「仏様」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 22.41%、女性患者群 n=59 の 20.33%、患者全体 n=117 の 21.30%である。〈神さま〉という刺激語の「仏様」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.07$ df=1 p<0.80)。

〈神さま〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈神さま〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈神さま〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体 n=117 の 5.9%である。〈神さま〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.64$ df=

1 p<0.50)。

<神さま>という刺激語は、「反応不能」の出現率が中位である。<神さま>という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人の出現数が中位である。<神さま>という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。<神さま>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体の 2.56%である。<神さま>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、<神さま>という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。<神さま>という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

<看護婦さん>という刺激語の分析の結果

<看護婦さん>という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。<看護婦さん>という刺激語は、「ポピュラー反応」がない。<看護婦さん>という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。<看護婦さん>という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。<看護婦さん>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.48%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 5.9%である。<看護婦さん>という刺激語は、「遅延反応」の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=0.15$ df=1 p<0.70)。

<看護婦さん>という刺激語は、「反応不能」の出現率が中位である。<看護婦さん>という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人の出現数が中位である。<看護婦さん>という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。<看護婦さん>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 2.56%である。<看護婦さん>という刺激語の「反応不能」

の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、<看護婦さん>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

<薬>という刺激語の分析の結果

<薬>という刺激語は、「病気」という連想反応の出現率が高い。<薬>という刺激語は、「病気」という連想反応が「ポピュラー反応」である。<薬>という刺激語の「病気」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 13.79%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 10.25%である。<薬>という刺激語の「病気」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.89$ df=1 p<0.50)。

<薬>という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。<薬>という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。<薬>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.48%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体の 6.8%である。<薬>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、30%水準で有意である ($\chi^2=1.15$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、<薬>という刺激語にすぐに答えられない人が多い。

<薬>という刺激語は、「反応不能」の出現率が中位である。<薬>という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。<薬>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 5.08%、患者全体の 3.41%である。<薬>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.24$ df=1 p<0.70)。病気別に調査すると、<薬>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

表2 「ポピュラー反応」 出現率% 男女の差 有意差検定 n=117

＜刺激語＞「ポピュラー反応」	患者全体群 n=117	男性患者群 n=58	女性患者群 n=59	男女の差 χ^2	df	有意差検定 p
P 反応合計個	899 個	445 個	454 個			
P 反応個平均	7.68 個	7.67 個	7.69 個			
P 反応個 SD	SD6.36	SD6.36	SD5.65			
「ポピュラー反応」平均	22.56%	22.56%	22.57%			
＜夫＞「妻」	50.42%	53.44%	47.45%	$\chi^2=0.41$	df= 1	p<0.50
＜男＞「女」	69.23%	77.58%	61.01%	$\chi^2=3.76$	df= 1	p<0.10
＜女＞「男」	53.84%	56.89%	50.84%	$\chi^2=0.43$	df= 1	p<0.70
＜過去＞「未来」	23.93%	20.68%	27.11%	$\chi^2=0.66$	df= 1	p<0.30
＜過去＞「現在」	11.11%	10.34%	11.86%	$\chi^2=0.06$	df= 1	p<0.80
＜学校＞「先生」	18.80%	18.96%	18.60%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
＜学校＞「生徒」	18.80%	15.51%	22.03%	$\chi^2=0.81$	df= 1	p<0.30
＜学校＞「勉強」	15.38%	18.96%	11.86%	$\chi^2=1.13$	df= 1	p<0.20
＜神さま＞「仏様」	21.36%	22.41%	20.33%	$\chi^2=0.07$	df= 1	p<0.80
＜薬＞「病気」	10.25%	13.79%	6.77%	$\chi^2=0.89$	df= 1	p<0.50
＜現在＞「過去」	14.52%	6.89%	22.03%	$\chi^2=3.41$	df= 1	p<0.10
＜現在＞「未来」	11.96%	8.62%	15.25%	$\chi^2=0.39$	df= 1	p<0.50
＜子供＞「かわいい」	18.80%	24.13%	13.55%	$\chi^2=2.14$	df= 1	p<0.20
＜子供＞「大人」	11.11%	6.89%	15.25%	$\chi^2=1.30$	df= 1	p<0.30
＜先生＞「生徒」	25.64%	20.68%	30.50%	$\chi^2=1.47$	df= 1	p<0.50
＜退院＞「入院」	20.51%	18.96%	22.03%	$\chi^2=0.16$	df= 1	p<0.70
＜タバコ＞「吸う」	11.96%	13.79%	10.16%	$\chi^2=0.36$	df= 1	p<0.50
＜父親＞「母親」	35.89%	34.48%	37.28%	$\chi^2=0.10$	df= 1	p<0.80
＜注射＞「痛い」	24.78%	29.31%	20.33%	$\chi^2=1.26$	df= 1	p<0.30
＜注射＞「針」	10.25%	10.34%	10.16%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
＜机＞「椅子」	41.02%	39.65%	42.37%	$\chi^2=0.08$	df= 1	p<0.70
＜机＞「勉強」	14.52%	15.51%	13.55%	$\chi^2=0.09$	df= 1	p<0.80
＜妻＞「夫」	38.46%	37.93%	38.98%	$\chi^2=0.04$	df= 1	p<0.80
＜テレビ＞「ラジオ」	12.82%	13.79%	11.86%	$\chi^2=0.09$	df= 1	p<0.80
＜電気＞「明るい」	17.94%	12.06%	23.72%	$\chi^2=2.69$	df= 1	p<0.20
＜入院＞「退院」	28.20%	24.13%	32.20%	$\chi^2=0.93$	df= 1	p<0.50
＜入院＞「病気」	14.52%	17.24%	11.86%	$\chi^2=0.73$	df= 1	p<0.50
＜母親＞「父親」	25.64%	27.58%	23.72%	$\chi^2=0.22$	df= 1	p<0.70
＜病院＞「患者」	23.07%	27.58%	18.60%	$\chi^2=1.31$	df= 1	p<0.30
＜不安＞「安心」	11.11%	5.17%	16.94%	$\chi^2=3.00$	df= 1	p<0.10
＜勉強＞「嫌い」	11.11%	10.34%	11.86%	$\chi^2=0.06$	df= 1	p<0.80
＜未来＞「過去」	16.23%	10.34%	22.03%	$\chi^2=2.93$	df= 1	p<0.10
＜未来＞「将来」	11.96%	13.79%	10.16%	$\chi^2=0.36$	df= 1	p<0.50
＜レコード＞「音楽」	22.22%	29.31%	15.25%	$\chi^2=3.34$	df= 1	p<0.10

＜車＞という刺激語の分析の結果

＜車＞という刺激語には、連想反応が多種多様に出現する。＜車＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。

＜車＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は中位である。＜車＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 7.6%である。＜車＞という刺激語は、連想する難しさが中位であると考察される。＜車＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男

女差は有意ではない ($\chi^2=0.45$ df= 1 p<0.50)。

＜車＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜車＞という刺激語は連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜車＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 0.00%、患者全体 n=117 の 1.70%である。＜車＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.52$ df= 1 p<0.50)。病気別に調査すると、＜車＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。

<車>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 2.98%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。精神科患者群 n=67 には、<車>という刺激語で「反応不能」の人がいる。

<けんか>という刺激語の分析の結果

<けんか>という刺激語には、連想反応が多種多様に出現する。<けんか>という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。<けんか>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い（出現率 10.0%以上）。<けんか>という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。<けんか>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 15.25%、患者全体 n=117 の 10.2%である。<けんか>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、1%水準で有意である ($\chi^2=13.36$ df=1 p<0.01)。女性患者群 n=59 は、<けんか>という刺激語で連想反応をすぐに答えられない人が多い。

<けんか>という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。<けんか>という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。<けんか>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 0.00%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体の 0.85%である。<けんか>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、<けんか>という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。精神科患者群 n=67 には、<けんか>という刺激語で答えられない人がいる。<けんか>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 1.49%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

<現在>という刺激語の分析の結果

<現在>という刺激語は、「過去」という連想反応と「未来」という連想反応などが「ポピュラー反応」である。<現在>という刺激語の「過去」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の 22.03%、患者全体 n=117 の 14.52%である。<現在>という刺激語の「過去」という連想反応の出現数の男女差は10%水準で有意である ($\chi^2=3.41$ df=1 p<0.10)。

女性患者群 n=59 は、<現在>という刺激語で「過去」という連想反応を出す人が多い。

<現在>という刺激語は、「未来」という連想反応の出現率も高い。<現在>という刺激語の「未来」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 15.25%、患者全体 n=117 の 11.96%である。<現在>という刺激語の「未来」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.39$ df=1 p<0.50)。

<現在>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い（出現率 10.0%以上）。<現在>という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。<現在>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群の 11.86%、患者全体 n=117 の 10.2%である。<現在>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.19$ df=1 p<0.70)。

<現在>という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。<現在>という刺激語は、連想するのが難しい言葉である。<現在>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体の 5.98%である。<現在>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.64$ df=1 p<0.50)。病気別に調査すると、<現在>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 8.95%、整形外科患者群 n=13 の 7.69%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者

群 n=21 の 0.00%である。

＜恋人＞という刺激語の分析の結果

＜恋人＞という刺激語には、連想反応が多種多様に出現する。＜恋人＞という刺激語の連想反応には、「ポピュラー反応」がない。＜恋人＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。＜恋人＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜恋人＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 8.5%である。＜恋人＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.71$ df=1 p<0.50)。

＜恋人＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。＜恋人＞という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人が多い。＜恋人＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜恋人＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体 n=117 の 5.98%である。＜恋人＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.19$ df=1 p<0.70)。病気別に調査すると、＜恋人＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 5.97%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 9.52%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜子供＞という刺激語の分析の結果

＜子供＞という刺激語は、「かわいい」という連想反応と「大人」という連想反応の二つが「ポピュラー反応」である。＜子供＞という刺激語の「かわいい」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 24.13%、女性患者群 n=59 の 13.55%、患者全体 n=117 は 18.80%である。＜子供＞という刺激語の「かわいい」という連想反応の出現数の男女差は 20%水準で有意である ($\chi^2=2.14$ df=1 p<0.20)。男性患者群 n=58 は、＜子供＞という刺激語に「かわいい」という連想反応

を出す人が多い。

＜子供＞という刺激語は、「大人」という連想反応も多い。＜子供＞という刺激語の「大人」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の 15.25%、患者全体 n=117 の 11.11%である。＜子供＞という刺激語の「大人」という連想反応の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.30$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、＜子供＞という刺激語に「大人」という連想反応を出す人が多い。

＜子供＞という刺激語は、遅延反応の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。＜子供＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜子供＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 12.06%、女性患者群 n=59 の 11.86%、患者全体 n=117 の 11.9%である。＜子供＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.06$ df=1 p<0.80)。

＜子供＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。＜子供＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜子供＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体の 5.12%である。＜子供＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.15$ df=1 p<0.70)。

＜自殺＞という刺激語の分析の結果

＜自殺＞という刺激語には、連想反応が多種多様に出現する。＜自殺＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜自殺＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。＜自殺＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 12.06%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 9.4%である。＜自殺＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.44$ df=1 p<0.70)。男性患者群 n=58 は、＜自殺＞という刺激語で連想反応をすぐに答えることが難しい人が多い。

＜自殺＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。＜自殺＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜自殺＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 3.41%である。＜自殺＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.27$ df=1 p<0.70)。病気別に調査すると、＜自殺＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜自分＞という刺激語の分析の結果

＜自分＞という刺激語^{11) 12)}には、連想反応が多種多様に出現する。＜自分＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜自分＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。＜自分＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。

＜自分＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 18.96%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 14.5%である。＜自分＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は10%水準で有意である ($\chi^2=3.08$ df=1 p<0.10)。男性患者群 n=58 は、＜自分＞という刺激語で連想反応をすぐに答えることが難しい人が多い。

＜自分＞という刺激語は、「反応不能」が多い。＜自分＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜自分＞という刺激語の「反応不能」の出現率は高く、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117 の 10.25%である。＜自分＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、＜自分＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 11.94%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の

14.28%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜新聞＞という刺激語の分析の結果

＜新聞＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜新聞＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜新聞＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。

＜新聞＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜新聞＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 13.79%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 10.2%である。＜新聞＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.89$ df=1 p<0.50)。＜新聞＞という刺激語の「反応不能」の出現数は少ない。＜新聞＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜新聞＞という刺激語の「反応不能」の出現率は患者全体 n=117 の 0.85%である。＜新聞＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。精神科患者群 n=67 には、＜新聞＞という刺激語で「反応不能」の人がいる。

＜セックス＞という刺激語の分析の結果

＜セックス＞という刺激語¹³⁾には、連想反応が多種多様に出現する。＜セックス＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜セックス＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。＜セックス＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜セックス＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 16.94%、患者全体 n=117 の 13.6%である。＜セックス＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は20%水準で有意である ($\chi^2=1.08$ df=1 p<0.20)。女性患者群 n=59 は、＜セックス＞という刺激語で連想反応をすぐに答えることが難しい人が多い。

<セックス>という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。<セックス>という刺激語は、連想反応が心にわいて来ない人が多い。<セックス>という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。<セックス>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の

15.25%、患者全体 n=117 の 11.96%である。<セックス>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.30$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、<セックス>という刺激語で答えられない人が多い。病気別に調査すると、<セックス>という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科

表3 「遅延反応」% 男女の差 有意差検定 n=117

「遅延反応」	患者全体 n=117	男性患者群 n=58	女性患者群 n=59	男女の差 χ^2	df	有意差検定 p
「遅延反応」合計	411個	222個	189個			
「遅延反応」平均個	3.51個	3.82個	3.20個			
「遅延反応」平均%	6.00%	6.58%	5.42%			
<愛情>	14.5%	20.68%	8.47%	$\chi^2=2.67$	df= 1	p<0.20
<うち>	6.8%	5.17%	8.47%	$\chi^2=0.11$	df= 1	p<0.80
<お酒>	5.9%	6.89%	5.08%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<夫>	6.8%	6.89%	6.77%	$\chi^2=0.03$	df= 1	p<0.90
<男>	7.6%	12.06%	3.38%	$\chi^2=1.77$	df= 1	p<0.20
<女>	4.2%	8.62%	0.00%	$\chi^2=3.41$	df= 1	p<0.10
<過去>	7.6%	3.48%	6.77%	$\chi^2=0.15$	df= 1	p<0.70
<学校>	2.5%	3.48%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<神さま>	5.9%	8.62%	3.38%	$\chi^2=0.64$	df= 1	p< 0.50
<看護婦さん>	5.9%	3.48%	6.77%	$\chi^2=0.15$	df= 1	p<0.70
<薬>	6.8%	3.48%	10.16%	$\chi^2=1.15$	df= 1	p<0.30
<車>	7.6%	5.17%	10.16%	$\chi^2=0.45$	df= 1	p< 0.50
<けんか>	10.2%	5.17%	15.25%	$\chi^2=13.36$	df= 1	p< 0.01
<現在>	10.2%	8.62%	11.86%	$\chi^2=0.19$	df= 1	p<0.70
<恋人>	8.5%	10.34%	6.77%	$\chi^2=0.71$	df= 1	p< 0.50
<子供>	11.9%	12.06%	11.86%	$\chi^2=0.06$	df= 1	p<0.80
<自殺>	9.4%	12.06%	6.77%	$\chi^2=0.44$	df= 1	p< 0.50
<自分>	14.5%	18.96%	10.16%	$\chi^2=3.08$	df= 1	p<0.10
<新聞>	10.2%	13.79%	6.77%	$\chi^2=0.89$	df= 1	p<0.50
<セックス>	13.6%	10.34%	16.94%	$\chi^2=1.08$	df= 1	p<0.20
<先生>	7.6%	8.62%	6.77%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<尊敬>	11.9%	12.06%	11.86%	$\chi^2=0.06$	df= 1	p<0.80
<退院>	8.5%	8.62%	8.47%	$\chi^2=0.09$	df= 1	p<0.80
<大学>	7.6%	6.89%	8.47%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<タバコ>	5.9%	6.89%	3.38%	$\chi^2=0.19$	df= 1	p<0.70
<父親>	5.9%	6.89%	5.08%	$\chi^2=0.10$	df= 1	p<0.80
<注射>	4.2%	3.48%	5.08%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<机>	6.8%	10.34%	3.38%	$\chi^2=1.26$	df= 1	p<0.30
<妻>	6.8%	8.62%	5.08%	$\chi^2=0.15$	df= 1	p<0.70
<テレビ>	6.8%	10.34%	3.38%	$\chi^2=1.26$	df= 1	p<0.30
<電気>	11.1%	10.34%	11.86%	$\chi^2=0.06$	df= 1	p<0.80
<電波>	13.6%	13.79%	15.25%	$\chi^2=0.05$	df= 1	p<0.90
<友達>	11.9%	13.79%	10.16%	$\chi^2=0.10$	df= 1	p<0.80
<入院>	7.6%	10.34%	5.08%	$\chi^2=0.13$	df= 1	p<0.80
<母親>	10.2%	10.34%	10.16%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<ピストル>	4.2%	3.48%	5.08%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<病院>	5.9%	8.62%	1.69%	$\chi^2=1.63$	df= 1	p<0.30
<病気>	7.6%	8.62%	6.77%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<不安>	14.5%	15.51%	13.55%	$\chi^2=0.09$	df= 1	p<0.80
<勉強>	11.9%	12.06%	10.16%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<未来>	4.2%	8.62%	0.00%	$\chi^2=3.41$	df= 1	p<0.10
<レコード>	5.9%	5.17%	6.77%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95

患者群 n=67 の 14.92%、心身医学患者群 n=16 の 18.75%。脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜先生＞という刺激語の分析の結果

＜先生＞という刺激語は、「生徒」という連想反応の出現率が高い。＜先生＞という刺激語は、「生徒」という連想反応が「ポピュラー反応」である。＜先生＞という刺激語の「生徒」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 20.68%、女性患者群 n=59 の 30.50%、患者全体 n=117 の 25.64%である。＜先生＞という刺激語は、「生徒」という連想反応の出現数の男女差が有意ではない ($\chi^2=1.47$ df=1 p<0.50)。

＜先生＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。＜先生＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜先生＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 7.6%である。＜先生＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。＜先生＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜先生＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜先生＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 は 2.56%である。＜先生＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、＜先生＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 2.98%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜尊敬＞という刺激語の分析の結果

＜尊敬＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜尊敬＞という刺激語の連想反応には、「ポピュラー反応」がない。＜尊敬＞という刺激語は、遅

延反応の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。＜尊敬＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜尊敬＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 12.06%、女性患者群 n=59 の 11.86%、患者全体 n=117 の 11.9%である。＜尊敬＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.06$ df=1 p<0.80)。

＜尊敬＞という刺激語は、「反応不能」も多い。＜尊敬＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜尊敬＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117 は 6.83%である。＜尊敬＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.11$ df=1 p<0.80)。病気別に調査すると、＜尊敬＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 5.97%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 15.38%である。整形外科患者群 n=13 は、＜尊敬＞という刺激語で「反応不能」の人が多い。

＜退院＞という刺激語の分析の結果

＜退院＞という刺激語は、「入院」という連想反応の出現率が高い。＜退院＞という刺激語は、「入院」という連想反応の「ポピュラー反応」である。＜退院＞という刺激語の「入院」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 18.96%、女性患者群 n=59 の 22.03%、患者全体 n=117 の 20.51%である。＜退院＞という刺激語の「入院」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.16$ df=1 p<0.70)。＜退院＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は中位である。＜退院＞という刺激語は、連想をすぐに答えることの難しさが中位であると考察される。＜退院＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117

の8.5%である。〈退院〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.09$ $df=1$ $p<0.80$)。

〈退院〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。〈退院〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。〈退院〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の5.17%、女性患者群 $n=59$ の3.38%、患者全体 $n=117$ の4.27%である。〈退院〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。病気別に調査すると、〈退院〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。精神科患者群 $n=67$ には、〈退院〉という刺激語に「反応不能」の人がいる。〈退院〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ は7.46%、脳外科患者群 $n=21$ の0.00%、心身医学患者群 $n=16$ の0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の0.00%である。

〈大学〉という刺激語の分析の結果

〈大学〉という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。〈大学〉という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。

〈大学〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が中位である。〈大学〉という刺激語は、連想反応をすぐに答えることの難しさが中位であると考察される。〈大学〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の6.89%、女性患者群 $n=59$ の8.47%、患者全体 $n=117$ の7.6%である。〈大学〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。

〈大学〉という刺激語の「反応不能」は、出現数が少ない。〈大学〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈大学〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の3.44%、女性患者群 $n=59$ の0.00%、患者全体 $n=117$ の1.70%である。病気別に調査すると、〈大学〉という刺激語

の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。〈大学〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の1.49%、心身医学患者群 $n=16$ の0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の4.76%、整形外科患者群 $n=13$ の0.00%である。

〈タバコ〉という刺激語の分析の結果

〈タバコ〉という刺激語は、「吸う」という連想反応の出現率が高い。〈タバコ〉という刺激語の「吸う」という連想反応は「ポピュラー反応」である。〈タバコ〉という刺激語の「吸う」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の13.79%、女性患者群 $n=59$ の10.16%、患者全体 $n=117$ の11.96%である。〈タバコ〉という刺激語の「吸う」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.36$ $df=1$ $p<0.70$)。

〈タバコ〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈タバコ〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈タバコ〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の6.89%、女性患者群 $n=59$ の3.38%、患者全体 $n=117$ の5.9%である。〈タバコ〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.19$ $df=1$ $p<0.70$)。

〈タバコ〉という刺激語は、「反応不能」の出現数も少ない。〈タバコ〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈タバコ〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の3.44%、女性患者群 $n=59$ の0.00%、患者全体 $n=117$ の1.70%である。〈タバコ〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。病気別に調査すると、〈タバコ〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。〈タバコ〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の2.98%、心身医学患者群の0.00%、脳外科患者群の0.00%、整形外科患者群の0.00%である。

＜父親＞という刺激語の分析の結果

＜父親＞という刺激語は、「母親」という連想反応の出現率が高い。＜父親＞という刺激語は、「母親」という連想反応が「ポピュラー反応」である。＜父親＞という刺激語の「母親」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 34.48%、女性患者群 n=59 の 37.28%、患者全体 n=117 の 35.89%である。＜父親＞という刺激語の「母親」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.10$ df=1 p<0.80)。

＜父親＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。＜父親＞という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。＜父親＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の 5.08%、患者全体 n=117 の 5.9%である。＜父親＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.10$ df=1 p<0.80)。＜父親＞という刺激語の「遅延反応」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。

＜父親＞という刺激語は、「反応不能」の出現数も少ない。＜父親＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜父親＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 3.41%である。＜父親＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.27$ df=1 p<0.70)。病気別に調査すると、＜父親＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。精神科患者群 n=67 は、父親との問題が大きいらしいと考察される。＜父親＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 5.97%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜注射＞という刺激語の分析の結果

＜注射＞という刺激語は、「痛い」という連想反応と「針」という連想反応の二つが「ポピュラー反応」で

ある。＜注射＞という刺激語は、「痛い」連想反応の出現率が高い。＜注射＞という刺激語の「痛い」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 29.31%、女性患者群 n=59 の 20.33%、患者全体 n=117 の 24.78%である。＜注射＞という刺激語の「痛い」という連想反応の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.26$ df=1 p<0.30)。男性患者群 n=58 は、＜注射＞という刺激語に「痛い」という連想反応を出す人が多い。

＜注射＞という刺激語は、「針」という連想反応も多く出現する。＜注射＞という刺激語の「針」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 10.25%である。＜注射＞という刺激語の「針」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。

＜注射＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。＜注射＞という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。＜注射＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.48%、女性患者群 n=59 は 5.08%で、患者全体 n=117 の 4.2%である。＜注射＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。＜注射＞という刺激語の「遅延反応」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。

＜注射＞という刺激語は、「反応不能」の出現数も少ない。＜注射＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜注射＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117 の 5.12%である。＜注射＞という刺激語の「反応不能」の出現数は 30%水準で有意な男女差である ($\chi^2=1.52$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、＜注射＞という刺激語で「反応不能」になる人が多い。病気別に調査すると、＜注射＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。＜注射＞という刺激語

の「反応不能」の出現率は、心身医学患者群の 0.00%、
脳外科患者群の 0.00%、整形外科患者群の 0.00%であ
る。精神科患者群 n=67 は 8.95%である。

強」という連想反応の出現率が高い。<机>という刺
激語は、「椅子」という連想反応と「勉強」という連想
反応が「ポピュラー反応」である。

<机>という刺激語の分析の結果

<机>という刺激語は、「椅子」という連想反応と「勉

<机>という刺激語の「椅子」という連想反応の出
現率は、男性患者群 n=58 の 39.65%、女性患者群 n=59
の 42.37%、患者全体の 41.02%である。<机>という

表 4 「反応不能」 男女の差 有意差検定 n=117

反応不能	患者全体 n=117	反応不能 男 n=58	反応不能 女 n=59	男女の差 $\chi^2=$	df	有意差検定 p
反応不能合計	171 個	88 個	83 個			
反応不能平均個数	1.46 個	1.51 個	1.40 個			
反応不能平均%	2.48%	2.60%	2.37%			
<愛情>	4.27%	5.17%	3.38%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<うち>	2.56%	1.72%	3.38%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<お酒>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<夫>	3.41%	5.17%	1.69%	$\chi^2=0.27$	df= 1	p<0.70
<男>	0.85%	1.72%	0.00%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<女>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<過去>	5.98%	5.17%	5.08%	$\chi^2=0.15$	df= 1	p<0.70
<学校>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<神さま>	2.56%	3.44%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<看護婦さん>	2.56%	3.44%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<薬>	3.41%	1.72%	5.08%	$\chi^2=0.24$	df= 1	p<0.70
<車>	1.70%	3.44%	0.00%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<けんか>	0.85%	0.00%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<現在>	5.98%	8.62%	3.38%	$\chi^2=0.64$	df= 1	p<0.50
<恋人>	5.98%	6.89%	3.38%	$\chi^2=0.19$	df= 1	p<0.70
<子供>	5.12%	3.44%	6.77%	$\chi^2=0.15$	df= 1	p<0.70
<自殺>	3.41%	5.17%	1.69%	$\chi^2=0.27$	df= 1	p<0.70
<自分>	10.25%	10.34%	8.47%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<新聞>	0.85%	1.72%	0.00%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<セックス>	11.96%	6.89%	15.25%	$\chi^2=1.30$	df= 1	p<0.30
<先生>	2.56%	3.44%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<尊敬>	6.83%	5.17%	8.47%	$\chi^2=0.11$	df= 1	p<0.80
<退院>	4.27%	5.17%	3.38%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<大学>	1.70%	3.44%	0.00%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<タバコ>	1.70%	3.44%	0.00%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<父親>	3.41%	5.17%	1.69%	$\chi^2=0.27$	df= 1	p<0.70
<注射>	5.12%	1.72%	8.47%	$\chi^2=1.52$	df= 1	p<0.30
<机>	0.85%	1.72%	0.00%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<妻>	2.56%	5.17%	0.00%	$\chi^2=1.40$	df= 1	p<0.30
<テレビ>	0.00%	0.00%	0.00%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<電気>	3.41%	0.00%	6.77%	$\chi^2=2.27$	df= 1	p<0.20
<電波>	5.98%	3.44%	8.47%	$\chi^2=0.47$	df= 1	p<0.50
<友達>	4.27%	5.17%	3.38%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<入院>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<母親>	2.56%	5.17%	0.00%	$\chi^2=1.40$	df= 1	p<0.30
<ピストル>	2.56%	1.72%	3.38%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<病院>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50
<病気>	3.41%	5.17%	1.69%	$\chi^2=0.27$	df= 1	p<0.70
<不安>	7.69%	3.44%	10.16%	$\chi^2=1.15$	df= 1	p<0.30
<勉強>	2.56%	3.44%	1.69%	$\chi^2=0.00$	df= 1	p<0.95
<未来>	6.83%	6.89%	6.77%	$\chi^2=0.11$	df= 1	p<0.80
<レコード>	1.70%	1.72%	1.69%	$\chi^2=0.52$	df= 1	p<0.50

刺激語の「椅子」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.08$ $df=1$ $p<0.70$)。

<机>という刺激語は、「勉強」という連想反応を答える患者が多い。<机>という刺激語の「勉強」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 15.51%、女性患者群 $n=59$ の 13.55%、患者全体 $n=117$ の 14.52%である。<机>という刺激語の「勉強」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.09$ $df=1$ $p<0.80$)。

<机>という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。<机>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 10.34%、女性患者群 $n=59$ の 3.38%、患者全体 $n=117$ の 6.8%である。<机>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.26$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、<机>という刺激語にすぐに答えられない人が多い。

<机>という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。<机>という刺激語は連想するのが難しい言葉ではないと考察される。<机>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 1.72%、女性患者群 $n=59$ の 0.00%で、患者全体 $n=117$ の 0.85%である。<机>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。病気別に調査すると、<机>という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。精神科患者群 $n=67$ には、<机>という刺激語で「反応不能」の人がいる。<机>という刺激語の「反応不能」の出現率は、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、精神科患者群 $n=67$ の 1.49%である。

<妻>という刺激語の分析の結果

<妻>という刺激語は、「夫」という連想反応の出現率が高い。「夫」という連想反応は、<妻>という刺激語の「ポピュラー反応」である。<妻>という刺激語の「夫」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$

の 37.93%、女性患者群 $n=59$ の 38.98%、患者全体 $n=117$ の 38.46%である。<妻>という刺激語の「夫」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.04$ $df=1$ $p<0.80$)。

<妻>という刺激語は、「遅延反応」の出現数が多い。<妻>という刺激語は、連想をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。<妻>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 8.62%、女性患者群 $n=59$ の 5.08%、患者全体 $n=117$ の 6.8%である。<妻>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.15$ $df=1$ $p<0.70$)。

<妻>という刺激語は、「反応不能」の出現数も多い。<妻>という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。<妻>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 5.17%、女性患者群 $n=59$ の 0.00%、患者全体 $n=117$ の 2.56%で中位である。<妻>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.40$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、<妻>という刺激語に答えられない人が多い。病気別に調査すると、<妻>という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。精神科患者群 $n=67$ には、<妻>という刺激語で「反応不能」の人がいる。<妻>という刺激語の「反応不能」の出現率は、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、精神科患者群 $n=67$ の 4.47%である。

<テレビ>という刺激語の分析の結果

<テレビ>という刺激語は、「ラジオ」という連想反応の出現率が高い。<テレビ>という刺激語は、「ラジオ」という連想反応が「ポピュラー反応」である。<テレビ>という刺激語の「ラジオ」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 13.79%、女性患者群 $n=59$ の 11.86%、患者全体 $n=117$ の 12.82%である。<テレビ>という刺激語の「ラジオ」という連想反応の出

現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.09$ $df=1$ $p<0.80$)。

<テレビ>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 10.34%、女性患者群の 3.38%、患者全体 $n=117$ の 6.8%である。<テレビ>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.26$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、<テレビ>という刺激語で連想反応をすぐに答えることが難しい人が多い。

<テレビ>という刺激語には、「反応不能」が全く出現していない。<テレビ>という刺激語は、「反応不能」の出現率が、患者全体 $n=117$ で 0.00%である。<テレビ>という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。

<電気>という刺激語の分析の結果

<電気>という刺激語は、「明るい」という連想反応の出現率が高い。<電気>という刺激語は、「明るい」という連想反応が「ポピュラー反応」である。<電気>という刺激語の「明るい」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 12.06%、女性患者群 $n=59$ の 23.72%、患者全体 $n=117$ の 17.94%である。<電気>という刺激語の「明るい」という連想反応の出現数の男女差は 20%水準で有意である ($\chi^2=2.69$ $df=1$ $p<0.20$)。女性患者群 $n=59$ は、<電気>という刺激語で「明るい」という連想反応を出す人が多い。

<電気>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い (出現率 10.0%以上)。<電気>という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。<電気>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 10.34%、女性患者群 $n=59$ の 11.86%、患者全体 $n=117$ の 11.1%である。<電気>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.06$ $df=1$ $p<0.80$)。

<電気>という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。<電気>という刺激語は、連想するのが難しい

言葉ではないと考察される。<電気>という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 0.00%、女性患者群 $n=59$ の 6.77%、患者全体 $n=117$ の 3.41%である。<電気>という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は 20%水準で有意である ($\chi^2=2.27$ $df=1$ $p<0.20$)。女性患者群 $n=59$ は、<電気>という刺激語に答えられない人が多い。病気別に調査すると、<電気>という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。精神科患者群 $n=67$ には、<電気>という刺激語で「反応不能」の人がいる。<電気>という刺激語の「反応不能」の出現率は、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、精神科患者群 $n=67$ の 5.97%である。

<電波>という刺激語の分析の結果

<電波>という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。<電波>という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。<電波>という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い (出現率 10.0%以上)。<電波>という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。

<電波>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 13.79%、女性患者群 $n=59$ の 15.25%、患者全体 $n=117$ の 13.6%である。<電波>という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.05$ $df=1$ $p<0.90$)。病気別に調査すると、<電波>という刺激語の「遅延反応」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 11.9%、心身医学患者群 $n=16$ の 25.0%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.0%、整形外科患者群 $n=13$ の 30.7%である。精神科患者群 $n=67$ と心身医学患者群 $n=16$ と整形外科患者群 $n=13$ は、<電波>という刺激語ですぐに答えられない人が多い。

<電波>という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。<電波>という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。<電波>という刺激語の「反

応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 8.47%、患者全体 n=117 の 5.98%である。＜電波＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.47$ df=1 p<0.50)。病気別に調査すると、＜電波＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。＜電波＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 10.44%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

＜友達＞という刺激語の分析の結果

＜友達＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜友達＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜友達＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い（出現率 10.0%以上）である。

＜友達＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜友達＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 13.79%、女性患者群 n=59 の 10.16 %、患者全体 n=117 の 11.9%である。＜友達＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.10$ df=1 p<0.80)。

＜友達＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が中位である。＜友達＞という刺激語は、連想反応が心において来ない人の出現数が中位であると考察される。＜友達＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群 n=59 の 3.38%、患者全体 n=117 の 4.27%である。＜友達＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、＜友達＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 5.97%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 4.76%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。精神科患者群 n=67 と脳外科患者群 n=21 は、＜友達＞という刺激語で「反応不能」の人が

いる。

＜入院＞という刺激語の分析の結果

＜入院＞という刺激語は、「退院」という連想反応と「病気」という連想反応の出現率が高い。＜入院＞という刺激語は、「退院」という連想反応と「病気」という連想反応が「ポピュラー反応」である。

＜入院＞という刺激語の「退院」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 24.13%、女性患者群 n=59 の 32.20%、患者全体 n=117 の 28.20%である。＜入院＞という刺激語の「退院」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.93$ df=1 p<0.50)。

＜入院＞という刺激語は、「病気」という連想反応の出現率も高い。＜入院＞という刺激語の「病気」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 17.24%、女性患者群 n=59 の 11.86%で、患者全体 n=117 の 14.52%である。＜入院＞という刺激語の「病気」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.73$ df=1 p<0.50)。

＜入院＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が中位である。＜入院＞という刺激語は、連想反応を即答することの難しさが中位である。＜入院＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 5.08%、患者全体 n=117 の 7.6%である。＜入院＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.13$ df=1 p<0.80)。男性患者群 n=58 は、＜入院＞という刺激語にすぐに答えられない人が多い。

＜入院＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜入院＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜入院＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 は 1.70%である。＜入院＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.52$ df=1

$p<0.50$)。病気別に調査すると、＜入院＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。＜入院＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 2.98%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%である。

＜母親＞という刺激語の分析の結果

＜母親＞という刺激語は、「父親」という連想反応の出現率が高い。＜母親＞という刺激語は、「父親」という連想反応が「ポピュラー反応」である。＜母親＞という刺激語の「父親」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 27.58%、女性患者群 $n=59$ の 23.72%、患者全体 $n=117$ の 25.64%である。＜母親＞という刺激語の「父親」という連想反応の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.22$ $df=1$ $p<0.70$)。

＜母親＞という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。＜母親＞という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。＜母親＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 10.34%、女性患者群 $n=59$ の 10.16%、患者全体 $n=117$ の 10.2%である。＜母親＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。

＜母親＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜母親＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜母親＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、女性患者群 $n=59$ の 0.00%、男性患者群 $n=58$ の 5.17%、患者全体 $n=117$ の 2.56%である。＜母親＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.40$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、＜母親＞という刺激語で「反応不能」の人がいる。病気別に調査すると、＜母親＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。＜母親＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 4.47%、

心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%である。

＜ピストル＞という刺激語の分析の結果

＜ピストル＞という刺激語は、連想反応が多種多様に出現する。＜ピストル＞という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。＜ピストル＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。

＜ピストル＞という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。＜ピストル＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 3.48%、女性患者群 $n=59$ の 5.08%、患者全体 $n=117$ の 4.2%である。＜ピストル＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。＜ピストル＞という刺激語の「遅延反応」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。

＜ピストル＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜ピストル＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。＜ピストル＞という刺激語の「反応不能」の出現率は中位で、男性患者群 $n=58$ の 1.72%、女性患者群 $n=59$ の 3.38%、患者全体 $n=117$ の 2.56%である。病気別に調査すると、＜ピストル＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。＜ピストル＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 4.47%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%である。

＜病院＞という刺激語の分析の結果

＜病院＞という刺激語は、「患者」という連想反応の出現率が高い。＜病院＞という刺激語は、「患者」という連想反応が「ポピュラー反応」である。＜病院＞という刺激語の「患者」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 27.58%、女性患者群 $n=59$ の 18.60%、患者全体 $n=117$ の 23.07%である。＜病院＞という刺

激語の「患者」という連想反応の出現数の男女差は30%水準で有意である ($\chi^2=1.31$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、〈病院〉という刺激語に「患者」という連想反応を出す人が多い。

〈病院〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈病院〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈病院〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 8.62%、女性患者群の 1.69%、患者全体 $n=117$ の 5.9%である。〈病院〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は 30%水準で有意である ($\chi^2=1.63$ $df=1$ $p<0.30$)。男性患者群 $n=58$ は、〈病院〉という刺激語にすぐに答えられない人が多い。

〈病院〉という刺激語の「反応不能」の出現数は少ない。〈病院〉という刺激語は、連想するのが難しくないと考察される。〈病院〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 1.72%、女性患者群 $n=59$ の 1.69%、患者全体 $n=117$ の 1.70%である。〈病院〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.52$ $df=1$ $p<0.50$)。病気別に調査すると、〈病院〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 $n=67$ だけに出現している。〈病院〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%、心身医学患者群 $n=16$ の 0.00%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、精神科患者群の 7.46%である。

〈病気〉という刺激語の分析の結果

〈病気〉という刺激語には、連想反応が多種多様に出現する。〈病気〉という刺激語には、「ポピュラー反応」がない。〈病気〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が中位である。〈病気〉という刺激語は、連想をすぐに答えることが中位に難しいと考察される。〈病気〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 8.62%、女性患者群 $n=59$ の 6.77%、患者全体 $n=117$ の 7.6%である。〈病気〉という刺激語

の「遅延反応」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ $df=1$ $p<0.95$)。

〈病気〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。〈病気〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈病気〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 5.17%、女性患者群 $n=59$ の 1.69%、患者全体 $n=117$ の 3.41%である。〈病気〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.27$ $df=1$ $p<0.70$)。病気別に調査すると、〈病気〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 $n=67$ の 4.47%、心身医学患者群 $n=16$ の 6.25%、脳外科患者群 $n=21$ の 0.00%、整形外科患者群 $n=13$ の 0.00%である。

〈不安〉という刺激語の分析の結果

〈不安〉という刺激語は、「安心」という連想反応の出現率が高い。〈不安〉という刺激語の「安心」という連想反応は「ポピュラー反応」である。〈不安〉という刺激語の「安心」という連想反応の出現率は、男性患者群 $n=58$ の 5.17%、女性患者群 $n=59$ の 16.94%、患者全体 $n=117$ の 11.11%である。〈不安〉という刺激語の「安心」という連想反応の出現数の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=3.00$ $df=1$ $p<0.10$)。女性患者群 $n=59$ は、〈不安〉という刺激語で「安心」という連想反応を出す人が多い。

〈不安〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。〈不安〉という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。〈不安〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は高く、男性患者群 $n=58$ の 15.51%、女性患者群 $n=59$ の 13.55%、患者全体 $n=117$ の 14.5%である。〈不安〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は有意ではない ($\chi^2=0.09$ $df=1$ $p<0.80$)。

〈不安〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。〈不安〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。〈不安〉という刺激語の「反応不

能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 7.69%である。〈不安〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、30%水準で有意である ($\chi^2=1.15$ df=1 p<0.30)。女性患者群 n=59 は、〈不安〉という刺激語に答えられない人が多いと考察される。

病気別に調査すると、〈不安〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 7.46%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 14.28%である。整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。整形外科患者群 n=13 は、〈不安〉という刺激語に「反応不能」の人はいない。

〈勉強〉という刺激語の分析の結果

〈勉強〉という刺激語は、「嫌い」という連想反応の出現率が高い。〈勉強〉という刺激語は、「嫌い」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈勉強〉という刺激語の「嫌い」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 11.86%、患者全体 n=117 の 11.11%である。〈勉強〉という刺激語の「嫌い」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.06$ df=1 p<0.80)。

〈勉強〉という刺激語は、「遅延反応」の出現率が高い(出現率 10.0%以上)。〈勉強〉という刺激語は、連想反応をすぐに答えることが難しい言葉であると考察される。〈勉強〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 12.06%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 11.9%である。〈勉強〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。〈勉強〉という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。〈勉強〉という刺激語は、連想するのが難しい言葉ではないと考察される。〈勉強〉という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 3.44%、女性患者群 n=59 の 1.69%で、患者全体 n=117 の 2.56%である。〈勉強〉という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差

は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df=1 p<0.95)。病気別に調査すると、〈勉強〉という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。〈勉強〉という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 4.47%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00%である。

〈未来〉という刺激語の分析の結果

〈未来〉という刺激語は、「過去」という連想反応と「将来」という連想反応の出現率が高い。〈未来〉という刺激語は、「過去」という連想反応と「将来」という連想反応が「ポピュラー反応」である。〈未来〉という刺激語の「過去」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 10.34%、女性患者群 n=59 の 22.03%、患者全体 n=117 の 16.38%である。〈未来〉という刺激語の「過去」という連想反応の出現数の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=2.93$ df=1 p<0.10)。女性患者群 n=59 は、〈未来〉という刺激語に「過去」という連想反応を答える人が多い。

〈未来〉という刺激語は、「将来」という連想反応の出現率も高い。〈未来〉という刺激語の「将来」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 13.79%、女性患者群 n=59 の 10.16%、患者全体 n=117 の 11.96%である。〈未来〉という刺激語の「将来」という連想反応の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.36$ df=1 p<0.50)。〈未来〉という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。〈未来〉という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。〈未来〉という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 8.62%、女性患者群 n=59 の 0.00%、患者全体 n=117 の 4.2%である。〈未来〉という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=3.41$ df=1 p<0.10)。男性患者群 n=58 は、〈未来〉という刺激語ですぐに答えられない人が多い。

＜未来＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が多い。＜未来＞という刺激語は、連想するのが難しい言葉であると考察される。＜未来＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が高く、男性患者群 n=58 の 6.89%、女性患者群 n=59 の 6.77%、患者全体 n=117 の 6.83% である。＜未来＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.11$ df= 1 p<0.80)。病気別に調査すると、＜未来＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、精神科患者群 n=67 の 8.95%、心身医学患者群 n=16 の 6.25%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 7.69% である。脳外科患者群 n=21 は、＜未来＞という刺激語に「反応不能」の人がいない。

＜レコード＞という刺激語の分析の結果

＜レコード＞という刺激語は、「音楽」という連想反応の出現率が高い。＜レコード＞という刺激語は、「音楽」という連想反応が「ポピュラー反応」である。＜レコード＞という刺激語の「音楽」という連想反応の出現率は、男性患者群 n=58 の 29.31%、女性患者群 n=59 の 15.25%、患者全体 n=117 の 22.27% である。＜レコード＞という刺激語の「音楽」という連想反応の出現数の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=3.34$ df= 1 p<0.1)。男性患者群 n=58 は、＜レコード＞という刺激語で「音楽」という連想反応を出す人が多い。

＜レコード＞という刺激語は、「遅延反応」の出現数が少ない。＜レコード＞という刺激語は、連想反応を答えやすい言葉であると考察される。＜レコード＞という刺激語の「遅延反応」の出現率は、男性患者群 n=58 の 5.17%、女性患者群の 6.77%、患者全体 n=117 の 5.9% である。＜レコード＞という刺激語の「遅延反応」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.00$ df= 1 p<0.95)。

＜レコード＞という刺激語は、「反応不能」の出現数が少ない。＜レコード＞という刺激語は、連想反応を

答えることが難しい人も少ないと考察される。＜レコード＞という刺激語の「反応不能」の出現率は、男性患者群 n=58 の 1.72%、女性患者群 n=59 の 1.69%、患者全体 n=117 の 1.70% である。＜レコード＞という刺激語の「反応不能」の出現数の男女差は、有意ではない ($\chi^2=0.52$ df= 1 p<0.50)。病気別に調査すると、＜レコード＞という刺激語の「反応不能」は、精神科患者群 n=67 だけに出現している。＜レコード＞という刺激語は、「反応不能」の出現率が、精神科患者群 n=67 の 2.98%、心身医学患者群 n=16 の 0.00%、脳外科患者群 n=21 の 0.00%、整形外科患者群 n=13 の 0.00% である。

IV まとめ

本研究の患者全体 n=117 は、著書『言語連想検査法—WAT-IIから見た心の世界』²⁾の臨床心理記録 468 名から抽出した。患者全体 n=117 の診断は、精神科患者群 n=67、心身医学患者群 n=16、脳外科患者群 n=21、整形外科患者群 n=13 である (表 1)。患者の年齢を調査した。患者全体 n=117 は年齢平均 37.67 歳 (SD 30.40)、精神科患者群 n=67 は年齢平均 34.41 歳 (SD 53.03)、心身医学患者群 n=16 は年齢平均 34.87 歳 (SD 38.18)、脳外科患者群 n=21 は年齢平均 45.95 歳 (SD 26.87)、整形外科患者群 n=13 は年齢平均 44.53 歳 (SD 26.87) である。男性患者群 n=58 は年齢平均 39.82 歳 (SD 50.91)、女性患者群 n=59 は年齢平均 35.55 歳 (SD 48.08) である。患者の年齢の男女差は、10%水準で有意である ($\chi^2=2.80$ df= 1 p<0.10)。

「ポピュラー反応」の出現数の平均は、患者全体 n=117 で 7.68 個 (SD 6.36) である。「ポピュラー反応」が多く出現した刺激語は、患者全体 n=117 の場合、＜夫＞・＜男＞・＜女＞など 3 個の刺激語である (出現率 50.0%以上) (表 2)。「ポピュラー反応」の出現数の男女差を調査した。＜男＞ - 「女」、＜学校＞ - 「勉強」、＜子供＞ - 「かわいい」、＜レコード＞ - 「音楽」

など 4 個の刺激語の「ポピュラー反応」は、有意水準 20.0%で男性患者群 $n=58$ に多い ($\chi^2=1.13\sim 3.76$ $df=1$ $p<0.10\sim 0.20$)。<現在> - 「過去」、<電気> - 「明るい」、<不安> - 「安心」、<未来> - 「過去」など 4 個の刺激語は、「ポピュラー反応」が有意水準 20.0%で女性患者群 $n=59$ に多い ($\chi^2=2.69\sim 3.41$ $df=1$ $p<0.10\sim 0.20$)。

「遅延反応」の出現個数の平均は、患者全体 $n=117$ で 3.51 個である (表 3)。<勉強>・<不安>・<母親>・<友達>・<電波>・<電気>・<尊敬>・<セックス>・<新聞>・<自分>・<子供>・<現在>・<けんか>・<愛情>など 14 個の刺激語は、患者全体 $n=117$ の場合、「遅延反応」が多い(出現率 10.0%以上)。「遅延反応」の出現数の男女差を調査した。<愛情>・<男>・<女>・<自分>・<未来>など 5 個の刺激語は、「遅延反応」が有意水準 20.0%で男性患者群 $n=58$ に多い ($\chi^2=1.77\sim 3.41$ $df=1$

$p<0.20$)。<けんか>という刺激語の「遅延反応」は有意水準 1.0%以下で女性患者群 $n=59$ に多い($\chi^2=13.3$ $df=1$ $p<0.01$)。<セックス>という刺激語の「遅延反応」は有意水準 20.0%以下で女性患者群 $n=59$ に多い ($\chi^2=1.08$ $df=1$ $p<0.20$)。

「反応不能」の出現個数の平均は、患者全体 $n=117$ の場合 1.46 個である (表 4)。<自分>・<セックス>などの 2 個の刺激語は、患者全体 $n=117$ の場合、「反応不能」が多い (出現率 10.0%以上)。「反応不能」の出現数の有意な男女差を調査した。<妻>・<母親>など 2 個の刺激語の「反応不能」は有意水準 30.0%以下で男性患者群 $n=58$ に多い ($\chi^2=1.40$ $df=1$ $p<0.30$)。<セックス>・<注射>・<不安>・<電気>など 4 個の刺激語の「反応不能」は有意水準 30.0%以下で女性患者群 $n=59$ に多い ($\chi^2=1.15\sim 2.27$ $df=1$ $p<0.20\sim 0.30$)。

引用文献

- 1) 小林俊雄 (1980) 「言語連想検査の紹介—精神科入院者用タイプWAT-II」 529 頁, 『日本心理学会第 44 回大会発表論文集』.
- 2) 小林俊雄 (1989) 『言語連想検査法—WAT-II から見た心の世界』 誠心書房.
- 3) 小林俊雄 (1995) 『子供の心が分かる—心理カウンセラーのノートから』 家政教育社.
- 4) 小林俊雄 (2004) 『臨床心理アセスメントの実際—カウンセリングと連想テスト』 関西看護出版.
- 5) 小林俊雄 (2000) 『よくわかる心理学講義』 関西看護出版.
- 6) 小林俊雄 (2013) 「言語連想検査法WAT-II の患者 117 名の遅延反応と反応不能の分析」 1 頁-13 頁, 『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要』 第 10 号.
- 7) 小林俊雄 (1981) 「言語連想検査の紹介 (5 報) —抑うつ患者の心理治療におけるWAT-IIの適用」 763 頁, 『日本心理学会第 48 回大会発表論文集』.
- 8) 小林俊雄 (1984) 「言語連想検査の紹介 (2 報) —教示の理解という観点から痴呆と精神薄弱のWAT-IIにおける特徴について」 686 頁, 『日本心理学会第 45 回大会発表論文集』.
- 9) 小林俊雄 (2014) 「言語連想検査法 WAT-II の患者 117 名のポピュラー反応の分析」 1 頁-14 頁, 『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要』 第 11 号.
- 10) 岩原信九郎 (1969) 「別表VII χ^2 の表」 432 頁-433 頁, 『新訂版教育と心理のための推計学』, 12 版, 日本文化科学社.

- 11) 小林俊雄 (2006a) 「連想テストにおける老人の自己イメージの男女差」 45 頁-46 頁, 『岡山心理学会第 54 回大会研究発表論文集』.
- 12) 小林俊雄 (2007) 「連想テストによる自己イメージの臨床心理アセスメントに見られる老人の男女差」 147 頁-152 頁, 『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要』, 4.
- 13) 小林俊雄 (2006b) 「連想テストの刺激語<セックス>と老人患者の男女差」 61 頁-73 頁, 『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要』, 3.